

2015年1月16日

日本基督教団 総会議長 石橋 秀雄 殿
日本基督教団芝教会 牧師 石井 道夫 殿
虎ノ門一丁目地区市街地再開発準備組合 御中

一般社団法人 日本建築学会関東支部
支部長 長谷見 雄二

「日本基督教団芝教会」の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、今般、日本基督教団芝教会について、環状第2号線周辺の再開発に伴う新たな土地利用計画があり、平成26年度中の都市計画決定等を経て、平成28年度の解体新築着工が検討されている旨、伺っております。

本教会は、わが国の近代建築の調査研究をまとめた『日本近代建築総覧』（日本建築学会、1980〔昭和55〕年刊行）や、『港区の歴史的建造物 港区歴史的建造物所在調査報告書』（港区教育委員会、2006〔平成18〕年刊行）にも掲載され、価値ある近代の建築物として広く周知されていることは、ご高承の通りと存じます。

1936(昭和11)年に、東京第一長老教会を前身として、間野貞吉の設計によって建設された鉄筋コンクリート造3階建の本教会は、昭和戦前期、特に関東大震災後の鉄筋コンクリート造普及期に建てられた建築物として、歴史的に貴重なものです。ゴシック建築の意匠を各所に引用しつつ、鉄筋コンクリート構造ながら木造小屋組を模した架構を採用するなど、近代日本において、同時代の先進的な建築技術を用いながら、西洋を起源とするキリスト教の建築文化を受容した事例としても、本教会は高い文化的・歴史的価値を有します。

一方、什器類や細部装飾をはじめとして、本教会には、創建当初の建築要素や構成が今日まで状態よく残されています。80年近くに及ぶ長年の使用によって、宗教空間としての独特の雰囲気とともに醸成されてきた、このかけがえのない建築物の歴史的価値は、今後も活用され続けることによって、ますます高まっていくものと考えられます。また、尖頭アーチのステンドグラスが中央に配された、西側ファサードの特徴的な本教会は、当該地域の都市景観を構成する貴重な要素として、また古くから当該地域の発展を見守ってきた証人としても、地域住民や信徒の方々に広く、愛着を持って親しまれてきたものであることは、いうまでもありません。

貴下におかれましては、この建築物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が保存活用されつつ、永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会関東支部といたしましては、本教会の保存活用に関して、学術的な観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

2015年1月16日

「日本基督教団芝教会」についての見解

一般社団法人 日本建築学会関東支部
歴史意匠専門研究委員会
主査 藤田 康 仁

東京都港区虎ノ門一丁目20番15号に建つ日本基督教団芝教会は、1874(明治7)年創立の東京第一長老教会を前身として、1936(昭和11)年に建設された鉄筋コンクリート造3階建ての教会堂である。矩形平面を基本に、その上部を切妻屋根で架構され、その内部は1階集会室、2階及び3階の礼拝堂などから構成されている。

本教会の設計者は間野貞吉(まのていきち:1903~1979年)、施工は竹村工務店に拠る。間野貞吉は、新潟県直江津市(現上越市)出身で、東京帝国大学工学部建築学科を卒業後、復興建築助成株式会社、日本万国博覧会工務部などを経て大林組に入社し、晩年まで勤務している。大林組では、全国のゴルフコース及び施設の設計を手掛け、「近代日本における会員制ゴルフクラブの主要施設に関する研究」の題目で東京大学から工学博士の学位を受けるなど、戦後日本のゴルフ施設建設に貢献した建築家として知られる。間野が本教会の設計を手掛けたのは、父・松蔵が教会の熱心な信徒であり、その縁で教会堂建設を依頼されたことによる。なお、間野の親族は、現在も信徒として、芝教会の活動に関わっている。

本教会は、日本建築学会が明治・大正・昭和時代の重要建築物をリストアップした『日本近代建築総覧』(1980年)にも掲載され、昭和戦前期のキリスト教建築として高く評価された建物である。特に、80年近くに及ぶ長きに亘り、虎ノ門一丁目地区の都市景観を構成してきた貴重な存在であると同時に、関東大震災後に建設された鉄筋コンクリート造の教会建築の実際を現在に伝えるものとして、重要な建物といえる。その建築史的価値は、以下の2点から指摘することができる。

1) 関東地方に現存する鉄筋コンクリート造の近代キリスト教建築としての価値

本教会は、鉄筋コンクリート造の簡素な箱型の建物を基本に、1階に集会所などの諸施設をまとめ、2、3階に2層吹き抜けの開放的な礼拝堂を配した建築構成を持つ。

プロテスタント教会特有の簡素な装飾構成の中で、道路に面した西側正面ファサードには、上部切妻形壁面の中央部分に尖頭アーチを持つ三連窓が配され、意匠上のアクセントとなっている。また、等間隔にバットレス状の柱型が張り出した側壁の窓開口にも尖頭形のものを用いられることで、ゴシック様式風の意匠的統一が図られている。一方、2、3階部分の外壁がプaster塗りであるのに対し、1階部分の外壁は、石積み風にみせた鉄平石張に覆われている。

礼拝堂内部は、2層吹き抜けの開放的な空間となっており、側壁面に配された連続窓からステンドグラスを通して採光がなされるなど、内部においても、ゴシック様式を模した空間演出がなされているとみなせる。その一方で、礼拝堂の上部架構の形式には、化粧天井

を張らずに、木組み風の小屋組が採用されている。この小屋組における梁及び桁は、一見木造のように見えるが、鉄筋コンクリート製の部材に型枠の木目跡を付け、木造風に彩色したものとみられ、木造の真束、棟木等を組み合わせた小屋組により、全体として木造架構の教会建築を模した意匠となっている。2012(平成 24)年に当委員会が行った、関東地方に現存する近代キリスト教建築の現況調査(『関東の近代キリスト教建築の現在』、日本建築学会関東支部歴史意匠専門研究委員会、2012[平成 24]年)において、調査対象とした鉄筋コンクリート造のキリスト教建築 23 件のうち、鉄筋コンクリート造の小屋組を木造に模した例は、唯一本教会にのみ確認されるが、立教女学院聖マーガレット礼拝堂(J. V. W. バーガミニー設計：1932 年竣工)のように、鉄骨製の大梁を木板で覆うことで、木造による架構を模した類例も認められる。一方、木組みの形式は様々であるが、礼拝室上部に木造小屋組を露出させた同時代の教会建築は、関東地方に多く認められる。

このように、本教会には、鉄筋コンクリート造建築に教会堂としてのイメージを付与する工夫が随所にみられる。本教会が建てられた昭和初期は、関東大震災を契機として、東京をはじめとした都市部に、鉄筋コンクリート造建築が普及していった時期である。これまで木造あるいは煉瓦造で建設されてきた教会堂を、鉄筋コンクリート造として設計する課題に直面した間野貞吉は、ゴシック様式を手がかりに、木造小屋組風の架構を鉄筋コンクリートにより表現することで、西洋起源のキリスト教建築を追及した。すなわち、本教会は、従来の建築技術に基づいた西洋起源の建築物に付与されていた意匠的規範を、当時の先進的な建築技術に置き換えながら引き継ごうとした建築的実践の好例であり、近代日本において西洋の建築文化が受容されていく文化的現象の一例として、高い文化的、歴史的価値を有するものといえる。

2) 細部装飾等にもみる意匠的・技術的な価値

本教会では、華やかな装飾の排された簡素さのなかにも、創建当初から用いられている質の高い室内装飾や調度品が、状態よく多数現存している。具体的には、幾何学的図案によるステンドグラス、照明器具、玄関扉をはじめとした木製の建具、説教壇、会衆用座席、椅子などが挙げられる。また、壁面に張られたボード状の建材や粒状にカットされた窓ガラス等、現在では珍しい建築材料も認められ、その希少性は高い。2011(平成 23)年 3 月の東日本大震災でも、こうした装飾類のほとんどが損傷を受けなかったとされ、施工に携わった職人らの技術力の高さとも捉えられる。こうした細部装飾における技術者、職人の技術の多くが再現の難しいものであることを勘案すれば、当時の建築技術を克明に記録するものとして、本遺構の重要性を指摘できる。

2015年1月27日

港区教育委員会 教育長 小池 眞喜夫 殿

一般社団法人 日本建築学会関東支部
支部長 長谷見 雄二

「日本基督教団芝教会」の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、今般、日本基督教団芝教会について、環状第2号線周辺の再開発に伴う新たな土地利用計画があり、平成26年度中の都市計画決定等を経て、平成28年度の解体新築着工が検討されている旨、伺っております。

本教会は、わが国の近代建築の調査研究をまとめた『日本近代建築総覧』（日本建築学会、1980〔昭和55〕年刊行）や、『港区の歴史的建造物 港区歴史的建造物所在調査報告書』（港区教育委員会、2006〔平成18〕年刊行）にも掲載され、価値ある近代の建築物として広く周知されていることは、ご高承の通りと存じます。

1936(昭和11)年に、東京第一長老教会を前身として、間野貞吉の設計によって建設された鉄筋コンクリート造3階建の本教会は、昭和戦前期、特に関東大震災後の鉄筋コンクリート造普及期に建てられた建築物として、歴史的に貴重なものです。ゴシック建築の意匠を各所に引用しつつ、鉄筋コンクリート構造ながら木造小屋組を模した架構を採用するなど、近代日本において、同時代の先進的な建築技術を用いながら、西洋を起源とするキリスト教の建築文化を受容した事例としても、本教会は高い文化的・歴史的価値を有します。

一方、什器類や細部装飾をはじめとして、本教会には、創建当初の建築要素や構成が今日まで状態よく残されています。80年近くに及ぶ長年の使用によって、宗教空間としての独特の雰囲気とともに醸成されてきた、このかけがえのない建築物の歴史的価値は、今後も活用され続けることによって、ますます高まっていくものと考えられます。また、尖頭アーチのステンドグラスが中央に配された、西側ファサードの特徴的な本教会は、当該地域の都市景観を構成する貴重な要素として、また古くから当該地域の発展を見守ってきた証人としても、地域住民や信徒の方々に広く、愛着を持って親しまれてきたものであることは、いうまでもありません。

貴下におかれましては、この建築物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が保存活用されつつ、永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会関東支部といたしましては、本教会の保存活用に関して、学術的な観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

2015年1月27日

「日本基督教団芝教会」についての見解

一般社団法人 日本建築学会関東支部
歴史意匠専門研究委員会
主査 藤田 康 仁

東京都港区虎ノ門一丁目20番15号に建つ日本基督教団芝教会は、1874(明治7)年創立の東京第一長老教会を前身として、1936(昭和11)年に建設された鉄筋コンクリート造3階建ての教会堂である。矩形平面を基本に、その上部を切妻屋根で架構され、その内部は1階集会室、2階及び3階の礼拝堂などから構成されている。

本教会の設計者は間野貞吉(まのていきち:1903~1979年)、施工は竹村工務店に拠る。間野貞吉は、新潟県直江津市(現上越市)出身で、東京帝国大学工学部建築学科を卒業後、復興建築助成株式会社、日本万国博覧会工務部などを経て大林組に入社し、晩年まで勤務している。大林組では、全国のゴルフコース及び施設の設計を手掛け、「近代日本における会員制ゴルフクラブの主要施設に関する研究」の題目で東京大学から工学博士の学位を受けるなど、戦後日本のゴルフ施設建設に貢献した建築家として知られる。間野が本教会の設計を手掛けたのは、父・松蔵が教会の熱心な信徒であり、その縁で教会堂建設を依頼されたことによる。なお、間野の親族は、現在も信徒として、芝教会の活動に関わっている。

本教会は、日本建築学会が明治・大正・昭和時代の重要建築物をリストアップした『日本近代建築総覧』(1980年)にも掲載され、昭和戦前期のキリスト教建築として高く評価された建物である。特に、80年近くに及ぶ長きに亘り、虎ノ門一丁目地区の都市景観を構成してきた貴重な存在であると同時に、関東大震災後に建設された鉄筋コンクリート造の教会建築の実際を現在に伝えるものとして、重要な建物といえる。その建築史的価値は、以下の2点から指摘することができる。

1) 関東地方に現存する鉄筋コンクリート造の近代キリスト教建築としての価値

本教会は、鉄筋コンクリート造の簡素な箱型の建物を基本に、1階に集会所などの諸施設をまとめ、2、3階に2層吹き抜けの開放的な礼拝堂を配した建築構成を持つ。

プロテスタント教会特有の簡素な装飾構成の中で、道路に面した西側正面ファサードには、上部切妻形壁面の中央部分に尖頭アーチを持つ三連窓が配され、意匠上のアクセントとなっている。また、等間隔にバットレス状の柱型が張り出した側壁の窓開口にも尖頭形のものを用いられることで、ゴシック様式風の意匠的統一が図られている。一方、2、3階部分の外壁がプラスター塗りであるのに対し、1階部分の外壁は、石積み風にみせた鉄平石張に覆われている。

礼拝堂内部は、2層吹き抜けの開放的な空間となっており、側壁面に配された連続窓からステンドグラスを通して採光がなされるなど、内部においても、ゴシック様式を模した空間演出がなされているとみなせる。その一方で、礼拝堂の上部架構の形式には、化粧天井

を張らずに、木組み風の小屋組が採用されている。この小屋組における梁及び桁は、一見木造のように見えるが、鉄筋コンクリート製の部材に型枠の木目跡を付け、木造風に彩色したものとみられ、木造の真束、棟木等を組み合わせた小屋組により、全体として木造架構の教会建築を模した意匠となっている。2012(平成 24)年に当委員会が行った、関東地方に現存する近代キリスト教建築の現況調査(『関東の近代キリスト教建築の現在』、日本建築学会関東支部歴史意匠専門研究委員会、2012[平成 24]年)において、調査対象とした鉄筋コンクリート造のキリスト教建築 23 件のうち、鉄筋コンクリート造の小屋組を木造に模した例は、唯一本教会にのみ確認されるが、立教女学院聖マーガレット礼拝堂(J. V. W. バーガミニー設計：1932 年竣工)のように、鉄骨製の大梁を木板で覆うことで、木造による架構を模した類例も認められる。一方、木組みの形式は様々であるが、礼拝室上部に木造小屋組を露出させた同時代の教会建築は、関東地方に多く認められる。

このように、本教会には、鉄筋コンクリート造建築に教会堂としてのイメージを付与する工夫が随所にみられる。本教会が建てられた昭和初期は、関東大震災を契機として、東京をはじめとした都市部に、鉄筋コンクリート造建築が普及していった時期である。これまで木造あるいは煉瓦造で建設されてきた教会堂を、鉄筋コンクリート造として設計する課題に直面した間野貞吉は、ゴシック様式を手がかりに、木造小屋組風の架構を鉄筋コンクリートにより表現することで、西洋起源のキリスト教建築を追及した。すなわち、本教会は、従来の建築技術に基づいた西洋起源の建築物に付与されていた意匠的規範を、当時の先進的な建築技術に置き換えながら引き継ごうとした建築的実践の好例であり、近代日本において西洋の建築文化が受容されていく文化的現象の一例として、高い文化的、歴史的価値を有するものといえる。

2) 細部装飾等にもみる意匠的・技術的な価値

本教会では、華やかな装飾の排された簡素さのなかにも、創建当初から用いられている質の高い室内装飾や調度品が、状態よく多数現存している。具体的には、幾何学的図案によるステンドグラス、照明器具、玄関扉をはじめとした木製の建具、説教壇、会衆用座席、椅子などが挙げられる。また、壁面に張られたボード状の建材や粒状にカットされた窓ガラス等、現在では珍しい建築材料も認められ、その希少性は高い。2011(平成 23)年 3 月の東日本大震災でも、こうした装飾類のほとんどが損傷を受けなかったとされ、施工に携わった職人らの技術力の高さとも捉えられる。こうした細部装飾における技術者、職人の技術の多くが再現の難しいものであることを勘案すれば、当時の建築技術を克明に記録するものとして、本遺構の重要性を指摘できる。



撮影：杉山経子